

あばっさ

つう語で
地の精霊

Vol. 18

HOW TO HELP

<年会費>大人: ¥5,000 18歳未満: ¥3,000

・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体

・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体

* 銀行からお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL: 03-5481-1912 FAX: 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

今年で30回アマゾン通いをしました。1989年に当団体を設立した時は、27年間も支援活動を続けていけることなど考えもしませんでした。現状を知れば知る程、私たち先進国に暮らす人間の飽くなき欲の為に熱帯林が消えていることが浮き彫りになり、この事実を多くの方に理解して頂きたく頑張ってきました。

昨年からはじめた「消防団事業」はインディオの若者が身体を張って命がけで火から森を守っています。まだまだ始まったばかりですので多岐にわたり支援が必要です。「養蜂事業」は5年目を迎え、継続資金がいき詰まりつつあり、どうしたものかと思案中ですが、世界に類のないシングー蜂蜜を日本で販売できる夢が叶うまで、ご賛同頂いている皆さまに、資金的なご協力をお願いを平にここで、お願い申し上げる次第です。

お金が無い世界を守るにはお金が必要だという矛盾を抱えながら、いつも資金作りに奔走してきました。賛同して頂ける沢山の方々の応援があってこそ、アマゾンの多少のお役に立っているのではと、自負しています。地道な支援を心がけ生涯現役で精進していく覚悟でいます。今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。今年も本当にありがとうございました。(南 研子)



応援してくれているメンバーと!!
10月末、ひしむき部が中心となり、「アマゾン30回通い」を催していただきました。とてもとても嬉しく、これからも頑張ろうと、勇気がわいてきました。ありがとうございました。



11月2日 都立江東商業
高校の生徒さん達が
高橋さんを訪問、実際に
アマゾンの説明を聞き、
次世代に希望を感じました。



森の守り人たちに寄り添って

～ 消防団事業責任者 アレッサンドロ・マリアーノに聞く



消防団事業では、カヤポ族、ジュルーナ族の若者たちが各村で消防団を結成して森林火災の防止と消火に取り組んでいます。その指導にあたるのは、マットグロソ州消防に勤務するアレッサンドロ・マリアーノ中佐。長年に渡って休暇を取っては先住民のもとに出向き手弁当で消防技術を伝えてきた人物です。昨年からは本格稼働した消防団事業と先住民に寄せる思いをマリアーノに聞きました。

(インタビュー・構成・写真:フリージャーナリスト 下郷さとみ)

■ カヤポの人々とは長いお付き合いだそうです。昨年2月にあなたから緊急支援依頼を受け取ったことから消防団事業が始まりましたが、これまでの経緯を教えてください

2002年に州政府がコリーデ市(カヤポ族居住区近隣の小都市)に消防署をはじめ開設した際に、しばらく赴任した当地でメガロン(カヤポ族リーダー。ラオーニ大長老の甥)と出会いました。そしてメガロンのリーダーとしての偉大さや人柄に惹かれ、深い知恵を持つ先住民の文化に関心を抱くようになりました。当時からメガロンは先住民居住区内で発生する森林火災を懸念しており、私も自分の持つ専門知識で役に立ちたいと考え、森林火災状況の視察や村人たちへのレクチャーを行ってきました。2006年には小さな助成金を得て、わずかな消火道具を購入できましたが、後の資金が続かず、活動休止の状態が続いていました。近年の森林火災の状況はますます深刻です。そこでメガロンの助言を得て、RFJに緊急支援を依頼することになりました。

■ 隣接するシングー・インディオ国立公園(以下PIX)で今年火災が大発生したのに比べ、消防団が活動するカポト・ジャリーナ(カヤポ族の居住区)では深刻な被害は見られませんでした。彼らの活躍の成果でしょうか。

近年アマゾンの乾燥化が進んでおり、今年は前の雨季(10月-4月)に少雨だったこともあって乾季(5月-9月)に森林火災が多発しました。PIX内の今年1月-9月の火災発生件数は1009件、しかし隣接するカポト・ジャリーナでは107件でした。これは消防団の若者たちのリーダーシップによって、村人全体が意識を持って防火・消火に取り組んだ成果の表れです。これまで若手リーダーたちが「いつか消防団を本格的に復活させたい」と願いつつ、彼ら自身が村で細々と続けてきた努力のたまものだとうれしく思います。

■ 8-9月の消防団講習会では若者たち自身の主体性を引き出すあなたの指導ぶりに感銘を受けました。このプロタゴニズモ(当事者自身が主人公=プロタゴニスタとなって問題や課題に主体的に取り組む運動のありかた)が事業の成功の鍵だと感じました。

プロタゴニズモは私が最も大切にしていることです。現地に通い始めた頃は、私の持つ技術をただ一方的にレクチャーするだけでしたが、彼らと深く関わるにつれて、彼ら自身が火の使い方の深い知恵を持つことに気づきました。「道具

を配って外から来た講師が技術指導をして終わり」では、彼ら自身の中にあるはずの主体性をつぶしてしまいます。そうではなく、彼らの伝統的な知恵という確固たるベースの上に近代的な技術を加味するという考えで事業を進めています。ですから講習会の最初の数日は、村の長老たちを招いて火や焼畑にまつわる神話や伝統的な火の扱い方を若者たちに披露してもらうよう工夫しました。若者たちは長い伝統文化を持つ先住民としての誇りを胸に、森林火災は自分たち自身の問題だという意識を持って取り組んでいます。カヤポはもともと勇壮な戦士として名を馳せた民族です。いま森林火災という大きな「敵」を前に若者たちは、戦士としての民族の記憶を蘇らせたかのように頑張っています。

■ 若者たちは来年に向けて新たな取り組みを企画していますね。消防団事業は単に「消防」ということを超えて、先住民コミュニティ全体のエンパワーメント、ひとつづりに大きく貢献しているように思います。

若者たちは、日本のみなさんの支援に頼りきりにならないためにも、消防団の経費を自分たちでまかなうしくみが必要だと考えています。そこで彼らの中から出てきたアイデアが「苗木育成販売事業」です。消防団の活動が休みの雨季の間、森で採取した種で苗木を育て、森林再生事業を行っている近隣の自治体に提供していく、というものです。来年は育苗圃場や消防団本部の建物の整備を行いたいと、彼らは張り切っています。また乾季には、団員が各村を巡回して、村人すべてを巻き込んだ防火意識作りに取り組めます。特に女性は伝統的に畑の担い手であり、焼畑の火の扱い方を学び合うには彼女たちの知恵が欠かせません。子どもたちも、頼もしい若者たちの姿を見てなにかを学んでくれるだろうと楽しみです。一同、日本の支援者のみなさんには、とても感謝しています。まだしばらくは、みなさんの支援が必要です。遠い場所で頑張っている若者たちを、どうぞ応援してください。

この事業に情熱を注ぐマリアーノ、謙虚で信頼できる人物です





南研子アマゾン30回の道程



1989年

1 回目
スティンガが「アマゾンを守ろう」をスローガンに掲げ来日。この時カヤボ族長老ラオーニと出会い、「アマゾンの森を守る手伝いをしてほしい」と伝言をもらったような気がして、5月に当団体「熱帯森林保護団体」を設立。



1992年
アマゾン
1 回目

初めてのシンゲー訪問。電気、ガス、水道、トイレ、風呂、貨幣制度もなくビックリ！全員が真っ裸で心も裸。写真は豹と猿のお祭。



2 回目

医療品が皆無で死んでいく人を前に支援を決意し、医療品を届けました。

雨季のジャングルで遭難。4日間1日干しぶどう5個、死を覚悟。助け出された時は喜びもひとしお。



1993年
3 回目

金採掘場から垂れ流された水銀で住民が汚染され、調査を開始、妊婦に大きな影響を及ぼしました。開発の為、1日で森6000カ所に火がつけられたのもちょうどこの頃です。今は亡きラオーニの長男テジェは、ダム建設反対の集会の帰り、交通事故で亡くなりました。



1997年
7 回目

経済的自立として「バナナプロジェクト」を開始。「植林事業」も開始しました。

この世界は目に見えるものと見えない精霊で成り立っています。



1999年
9 回目

シンゲーに初接触した“シンゲーの父”オルランド・ピラスボラス氏宅を訪問。

サンパウロで「インディオ展」を4回開催。日系企業の方々が応援して下さいました。



2000年
11 回目

カヤボ族地域6カ所にインディオの子どもの学校(寺子屋風)を建設。教室にはバクやオウムもいます。



2002年
14 回目

学校建設は「ポルトガル語が話せないとブラジル社会に通用しない」と、インディオリーダーたちからの強い要望で始めました。



15 回目

インディオ教師育成の成果として、インディオの先生も誕生しました。

2005年
18 回目

ピアラスに日本の草の根支援で多目的な学校を建設。サンパウロで応援してくれている人たち。アーティストのトミエオオタケさんは大の仲良しでしたが旅立たれました。



2007年

広島と川崎の「岡本太郎美術館」でインディオ展を催し、ラオーニを招待。沢山の人がラオーニとハグしました。



2008年
20 回目

カヤボ族の「カメ祭」。川の行程は700kmあり、船での移動は楽しくも、大変です。お風呂へ行く時の獣道でアナコンダと「こんにちは！」もありました。



2009年
21 回目

マトグロッソ州の政府関係者と会見。メイナク族のけんこちゃんとWけんこ。森が猛スピードで消えています。水路や陸路で行けない村へは、3度に1度落ちるセスナ機で行きます。



2010年
23 回目

カマユラ族の女性やラオーニとは、どんな支援を求めているか話し合います。「養蜂事業」開始。



2012年
25 回目

カマユラ族の女性自立で工芸品作りを支援、日本でも販売しました。子どもはいつもハッピー。スズメ蜂に刺され大変でした。



2014年

ラオーニと孫2人(ブライリとベポー)を招待。宮島大聖院や関東、新潟で良き時間を共に過ごしました。



2015年
29 回目

「消防団事業」開始。森が無くなったら全てがおしまいです。シンゲー川で獲れる魚“トゥクナレ”は絶品です。Photo: satomi shimogo



2016年
30 回目

2万kmを旅してきた蜂蜜は格別です。深刻な森の火災。インディオの人と森が残るように頑張ります。Photo: satomi shimogo

